

[Notes and Communications]

*The Mizuta Library of Rare Books
in the History of European Social Thought:
A Catalogue of the Collection held at Nagoya University Library,
edited by Eriko Nakai; & preface by Tatsuya Sakamoto
Edition Synapse, Routledge, 2014, xxxv+315 pp.*

安藤 隆穂

水田洋という存在抜きには、日本における社会思想史の学問としての確立は、ありえなかった。経済学史研究の成立と発展においても、水田は常にこれを先導し続けた。

水田洋は、1919年9月3日東京に生まれ、1941年12月東京商科大学（現一橋大学）を卒業、42年1月財団法人東亜研究所入所、同年11月より陸軍属となり南方諸島に従軍（43年1月16日-45年9月6日ジャワ軍政監調査官）、1946年6月復員、同年10月より東京商科大学特別研究生となり、1949年12月に助教授として名古屋大学法経学部（当時）に着任、1958年2月に名古屋大学経済学部教授に就任、1983年4月に定年退職、同年4月より93年3月まで名城大学商学部教授、1998年1月に日本学士院会員に選出、今日に至っている。

水田の思想史研究の歩みのうち、1970年ころまでについては、自著『ある精神の軌跡』（1978年）によって、うかがい知ることができる。その回想によれば、水田は、大学卒業アルバムの題詩の中に、「されどおもえ、あれ狂う嵐のなかに / 考える葦ついに枯れざりしを」と書いた。この時すでに、水田は「マルクス・ボーイ」であり、軍国主義による思想弾圧に抵抗する中で、マルクス主義を歴史的に検証する思想史への道を模索し、主として近代思想とマルクス主義関連の文献渉猟に努力していた。若い「考える葦」は、学ぶ仲間との連帯のみならず、書物を含む知性の歴史的共同性を絶やさないう抵抗を続けていたのであって、文献の保存自体が思想の実践であった。水田が従軍前夜に、主として「マルクス主義を勉強しようとする後輩の学生たち」のために、「留守中に蔵書が安全にかつ有効に利用されるような、方法を考え」、後輩の井出潤一郎にこれを託したという記述を読むとき、（思想史）研究にとって文献とその批判の持つ意味の重さを、あらためて教えられる思いがする。

水田が軍属として東南アジアにありながら、当地でボルケナウの著書原典を見つけ、邦訳のない後半部分をコピーして持ち帰り、多くの研究者の利用に供し、また『封建的世界像から市民的

世界像へ』と題して翻訳出版した(1965年)ことは、よく知られている。このような思想活動としての文献収集は、戦後一層活発となり、水田の個人蔵書は膨大となっていった。それは、軍国主義下の若い「考える輩」が抵抗をつらぬき、思想の巨木として戦後成長した軌跡を示す記録であり、日本における「社会思想史」の学問としての樹立の歴史を刻印する博物館でもある。

水田の個人蔵書は、洋書に限っても、2万冊以上におよんでいたが、そのうちから11,200冊以上が、2013年に、名古屋大学に寄贈または売却され、「水田文庫」となった。名古屋大学中央図書館は、「貴重書」(1850年以前出版のもの)約2,200冊を「水田文庫貴重書」として独立編集することとし、その他のうち、約4,800冊はまとめて別置き、さらに残りの約4,000冊を蔵書票(水田珠枝と連名)付きで分散収蔵した。

こうした経緯で、「水田文庫貴重書」は、2014年に開設された。そうして、その目録を英文図書として刊行したものが、ここで紹介する本書である。

編者の中井えり子は、名古屋大学の図書館員として、前任者故 河原和子の仕事を引き継いで、長年にわたり思想史関連図書の収集と所蔵に貢献した。水田は名古屋大学への着任(1949年)以来、名古屋大学での社会科学関連図書の充実のためにも尽力したが、これに河原、中井が協力したのである。その成果として、名古屋大学が数多くの思想史関連文献を所蔵することになったことは、後で言及する。「水田文庫貴重書」となった文献類も、それらの思想史関連コレクションと、ほぼ同様の収集過程をたどったものである。

本書の扉を飾るのは、坂本達哉による「序文」であり、「水田文庫貴重書」から見える思想史の世界、水田思想史の意味、内外に存在する同類の「文庫」との比較など、蔵書の紹介と解説を超えた思想史の論文とも言える記述となっている。「水田文庫貴重書」には、近代社会観成立史に関連する貴重な文献が、イギリスのみならず、大陸の広い諸地域にわたっておさめられ、今日の欧米の研究者にとっての稀覯本も多く含まれている。今回、英文による目録が、すぐれた英文「序文」付きで公刊され、「水田文庫貴重書」の存在が、海外の研究者にとっても親しみやすくなったことの意義は大きい。

「水田文庫貴重書」は、社会思想史研究の必要上個人的に集められたのであって、一橋大学所蔵の「メンガー文庫」や小樽商科大学所蔵の「シェル文庫」および「手塚文庫」などと同系列に属するだろう。しかし、「水田文庫貴重書」は、守備範囲の長さや広さにおいて他を押し、その多様性において収集の意図を測りかねるほどである。ここでは、個別の著作を具体的に取り上げる余裕がないので、「水田貴重書」が水田による「近代社会観成立史」の構想を支えた文献群の編集であることを強調しておきたい。「水田文庫貴重書」を前にするとき、たとえば、『近代人の形成』(東京大学出版会、1954年)、『アダム・スミス研究』(未来社、1968年)、Adam Smith's Library (Oxford: Clarendon Press, 2000)、『思想の国際転位』(名古屋大学出版会、2000年)、『新稿社会思想小史』(ミネルヴァ書房、2006年)、『アダム・スミス論集』(ミネルヴァ書房、2009年)と続く水田近代社会思想史の世界の創造現場に立ち会う思いに襲われるだろう。

「水田文庫貴重書」開設に先立って、名古屋大学中央図書館は、「文庫」の概要を、「I. 自然法

から啓蒙思想へ、II. スコットランド啓蒙思想、III. アダム・スミス思想体系の形成、IV. アダム・スミス思想の批判と継承」の四部構成として展示した。リブシウス『政治学』などをふくむ自然法論の文献群にトマス・ホッブズ『リヴァイアサン』（1651年）とその関連図書が登場し、アダム・スミスの『道徳感情論』（1759, 1761, 1790年各版）と『国富論』（1776年）への道程を多様な関連著作群が彩りをあたえている。ホッブズの提起した自己保存権を持つ自由平等な個人という理想をスミスが利己心を同感により相互規制する生産者の社会へと具体化するまでの過程を構成する思想家群が、多様な表情を見せ集合しているのをみれば、水田による独自の近代社会観成立史の深さと広さと多様性を再認識できるだろう。そうして、このような近代思想史の基本文脈の著作群に加えて、ホッブズやスミスに対する批判者の膨大な著作を含み、近代批判の思想が準備される過程を汲み取ることができるのも、「水田文庫貴重書」の重大な特色である。たとえば、「水田文庫貴重書」に含まれ、それ自体希少価値の高いスミスの著作の各国語への翻訳と受容と批判をたどるだけでも、近代思想の屈折と転位がロマン主義などの19世紀思想を生み出していくコンテキストが出現してくるだろう。

以上は、「水田文庫貴重書」を前にした感想の一例に過ぎないが、蔵書の守備範囲の広さを具体的に確認し、『ある精神の軌跡』（前掲）を指針に「目録」を点検すれば、いくつもの近代思想史の世界が浮かび上がってくるに違いない。

「水田文庫貴重書」が、水田個人蔵書のうち、核心部分とはいえ、その一部にすぎないことは、前に述べた。そうして、「水田文庫貴重書」に隣接する近代社会観成立史は、これまた、水田による社会思想史研究の全体ではない。日本における社会思想史学を起動した歴史意識は、単純化して言えば、戦前においては近代の受容であり、戦後においては、「近代の超克」の批判による近代の再受容であった。水田はマキアヴェッリにはじまる近代的社会観成立史を独自の対象設定と方法とによって構想しただけでなく、その近代への問いを現代思想史へと展開し、日本の社会思想史研究の軌道設定をリードしつづけてきた。したがって、水田の個人蔵書全体について知ること、水田の社会思想史の世界の全体像を把握するうえで不可欠であるし、それはまた、「水田文庫貴重書」の意義をより明確とするだろう。

評者は、大学院の水田ゼミナール出身であり、その偶然によって、水田個人蔵書の近くにおいて、その恩恵に浴し、その全体を比較的よく知る一人である。以下、書評としては逸脱となるが、水田個人蔵書全体について言及し、「水田文庫貴重書」の特徴理解の一助としたい。

「水田文庫貴重書」となる古典群が名古屋大学に移された2013年の段階で、水田個人蔵書全体としては、洋書に限っても、約2万冊以上が存在したことは、すでに述べた。したがって、水田蔵書の洋書群は、現在、個人所蔵部分と名古屋大学所蔵部分として存在していることになるが、さらに、すでにふれたように、名古屋大学中央図書館は、水田が中心となり長年にわたって収集した文庫類を保持している。すなわち、「ホッブズ・コレクション」(I, II, III)、「スペイン市民戦争関連資料」、「18世紀フランス自由思想家コレクション」などが、それぞれ文庫として存置されているのである。また、文庫類とは別にも、水田が購入に尽力した『ブリタニカ』初版、書き

込み付きコールリッジ所蔵本『蜂の寓話』（1724年版）などの稀覯本も収蔵されている。さらに、経済学部図書室にある「イギリス革命関係文献コレクション」も水田による収集文庫である。

現在水田の手元に保管されているのは、水田自身が、98歳の高齢をもともせず第一線で研究を続けるうえでとりわけ必要とする文献類であって、中心はロマン主義およびマルクス主義関連文献である。また、名古屋大学「水田文庫」の蔵書票が水田珠枝博士との連名になっているように、水田蔵書の全体は水田洋・珠枝夫妻の共有である。水田珠枝は日本の女性解放思想史学の開拓者であり、その独自収集文献数千冊も自宅所蔵となっていたが、名古屋大学に寄贈されることとなり、2017年秋に開設される名古屋大学「ジェンダー図書館」に収められることになっている。

水田個人蔵書には、これまたおびただしい和書が含まれている。その和書のうち、日本の近代思想と文学に関する文献を中心に選定された約2,400冊が、2015年に海を渡り、中国浙江大学に寄贈され、同大学「水田文庫」となった。同大学は、水田の主要著作の中国語訳版の刊行も企画しており、「水田文庫」が中国における社会思想史研究の開始と発展を促すことが期待される。

以上のように、水田の収集した蔵書、いわば広い意味での「水田文庫」は、名古屋大学所蔵の「水田文庫貴重書」を含む「水田文庫」、各種思想史関連文庫群、中国浙江大学「水田文庫」および水田個人蔵書からなり、さらに、連携図書として、現在名古屋大学で開設準備中の水田珠枝寄贈図書を付け加えることができる。広義の「水田文庫」の全体についても、統一した目録ができることが望まれる。

水田洋は、日本軍国主義の嵐の中で、マルクス主義の洗礼を受け、自由な文学的自己表現、民主主義、社会主義を求めて、思想史研究を開始した。そうして、『新稿社会思想小史』の「あとがき」で、社会思想史研究の基調が、カール・マルクス、マックス・ヴェーバー、ジャン・ポール・サルトルなどの「近代個人主義、合理主義、あるいはラディカルな民主主義」にあると回顧している。思想の生命力が「反大系・反体制」であるという確信を持ち続け、社会主義に近代的個人の精神を吹き込むという方法意識によって、独自の社会思想史を構想した。現在、ロマン主義と社会主義文献を手放さず研究を続ける姿は、社会主義の初心に帰ったともいえるが、それは自らが育てた豊かな近代を宿す、プラトン流に言えば「若く美しくなったマルクス・ボーイ」なのである。水田洋の社会思想史の樹立を可能にしたのは、自ら収集した古典文献群であり、「水田文庫貴重書」は、その核心部を構成している。

（安藤隆穂：名古屋大学名誉教授）